



和

四時に布一交好し海の中真八目も又え
ゆく海もとあるやうな枕のさうしは何んを
ふれん吉田法師の書えらぬを今に
一云もふ一交よ何れと交能緒好う一云ハ
こころをつゆさるゝ交一交ハと何れ 押春を
居已より来りて成美好うと云交
秋ハ西より押好う 一云ゆく春好

あふ川ふる形ふく 景は新ふく

しる海河より糸のよけぬ情ふたはづり

夏冬ハ春秋ハ順しる初るはと暑者々

秋ハ暮さるる暮寒ハ春ハおさけし初るく

いとこし交ハ春解けさるるはし交ハ

夏冬ハ変化ハ少き

く山空やうらうらくと雪は少竹有

秋 ふる行を外山の雲はまは

曉基 此は龍門ハ在るはる夜は會ハ通航

おのく潤ひさるる巻ふとらふふ深奥

及て晝村日月明千人めらるる人の世あり

十ふふはともか泳けりとし巻巻る

先らるる人言ふ人の世こそしきり中よ

一人の目明らしむ其一人ハ解るはるとる

又白葉と交るるはのひぬと

京へ
かきと 結りて 架

とれをいふ人あり其意なる夏の時一は
をうといふ事ハツク河のあふまるとかあるを
ゆ言はのふをえのよおう一をうといふ河
河のやうよふ人書りたる。神代のおまゝも
をうといふあるよふか見えはいう形もさくは
うのういふむとかなやせんをよせうふう

又一は河を其さう一はかきとふは
やういふもふれよをいふ一はかきとふ
コハさう一コハさう一はかきとふ河地より
いふるのそせれよは河がぬかきとふは
紐をさうとちかきとふはさう一はかきと
うちよふうちかきとふ其意なる夏の時一は
人の書りたるさう一はかきとふはかき
かきとふ人かきとふはかきとふはかきとふ

かゝるひしやと書つゝ
志うも清らなる
しつゝふふ人あつゝ
おもしろい事
なせりやとむ

白圖ハ禪と偈とよし
海をきて生涯独身之
富より奪ふんふと
あふん其しとておもひ
唇をひいて舌くちん
嘆息又偈語たりとを

きく先之阿ふさし
おアし嘆息之居士
いよく雅寂をさ
しつゝ

仇諧よもハハ傳
しつゝ附合の秘事
ををゆりしつゝ

とらひといふ夏こしと

知多の事未とてしる所は住る比能流とて不
善代の化り男六十余り三ツ四ツとて河内とて
水冬月十日とてつれくふる候と世とらくと
いふいふ形の夏をういふんと問りしと男答
かく思ふ事日とて扱もをさうとておをる
道の程十町とてうもれとてむとて文傘と

かきとてむとて文傘とておをる
字書とて書とておをる
閑ゆる所とて書とておをる
炭山とて書とておをる
おとらくとておとらくとて

涼一とて敷とてぬとて足とておとて行有

河の夏暮雨巻の會とてふの通船おとて

水鏡のや夏田の字よ... 迎も士朗

嘆息曰 調う揚東とよま... 毎よ風流よ

富より誰うかしく雅寂よつ... 心と養をひて

流き水と此白の天下に於て... 引一と

二十年を経るや... 桂五古集を祝す

終日と然い... 芭蕉翁に附合よ

年 貞海と... 養を水より

と... 乃水不又至て... 嘆息のそ業をさるるを

は... 乃水... 上人も世の中... 乃水... 乞食

世と聞え... 乃水

田植のや坐立よ... 乃水... 竹有

岱昔ハ未中丸を... 乃水... 勤仕の

いと... 乃水... 遊人... 余... 乃水

乃水... 乃水... 乃水... 乃水

雪刃... 乃水... 乃水... 乃水

五老峯のほりぬ庭あけ松よまほとよ
あふそて釜めゆーく水の音よ黄えさる

風月門て轉えん雪めく水白圖

士朗り舟三羅城う四夕目と一順ふり

再順と巡り夜いしく更さるやよ又さ

寂寂しく山々と岳輻うそらるをま影よ

おと流れてもあはあよすむ猫よええん

あまをさるもあるとそいあし門のたれこ

きしく飯ハ和らうよと中つみおあぬとき

大飯椀よ茶碗セツをのせさり押おぬ

手みく盛て釜めゆハあせ川着休め

ふしとあふをえああさあふふささ塩

四よ山のおとくふゆあけやうあると水を

つみあさる桂五沢ささあはあほの哉

あまひお流しよあさる雪ささしゆあま

あまあさるあまゆーあまあさるあま

孫をうちてこゝと口をひらきあへしとを
携ふふく入ぬ侍とも未だは口を
ひらきやめて衣紋を正し志願くとも未だりて
あうまうまは紙幅ふとくくを足侍はと
さくらやしのとわさぬもふく各きけ辛味を
おのれと味をわさるゝふ奥うまうま二碗
三碗つ喰てゆりぬ

行肺の賣さくつる地は連尻しふ宗道は
月をあうこよ天恵夜ものさくはのあは
桂とのふと遠慮ふくつはつは強はぬよや
答ふあうこよあまさく合をくるとふまはし
同輩は友とらあはくはあま無様をも智め
遠慮をもさくはあはくはあまはくはあまはく
つは強はくはあまはくはあまはくはあまはく
あまはくはあまはくはあまはくはあまはく

紙のり唐糸とふすはよ麻入るはるハ
かゝるは何虫や日おととのまゝくは
似て其丈僅三分のむーハハ志をく
仇潜をあらむとくとも蒼海万里あるま
河さる魂東南よきる戸を此紙よ
おふくや死ていく春秋を漂流一つむ
ぬくまふは席上よ至るあら詩よ
仇潜のむーきをく及魂の一角をあらむ

活る音をあらかゝるよおきましくは

かゝるはよやあらとまえていつゆのむ作有

薩大は西康児崎をあらと交連糸打掛て
一里くくるはあら山の上追おるま
三葉おちちよ再會をあら五とををさる
杖をあらふと口くよ約して既よ柳を
緒のむときよ推長といふ者の曰くくの

約交しそふふし〜約のたゞ〜二葉
五とせおうちよ二交杖をむくくおふハ交止
そふふ〜文通くまお後そふふハ〜の
の文生涯のおとひおふ〜し〜
さふふと交ふ心をいふ〜そふふよさふ

俊任やしす〜文鶴庵を寄
あけらぬ満ちる所〜
者〜のまじりあはし〜のま右の
日記もをとて〜
おふふ〜し〜
とら〜し〜
そふふ〜

さびの集のど
あやまの集のど
そよみとあひろよ候るまは候
そのあつとあつとあつと

一松庵

楚山

文化九申の
と
集

楚山

荒えても月見も夜ハ麗ふ
雁の交つらぬ茅の戸 岱雲
くぬきも柱のまはるる着えり 竹有
人ねえふし、跡見えふれ 山
誰やう杖を投る山の雲 雲
船の宿るといふわいとふ 有

さあ〜 竹葉集本のさう一途
 鏡をえせり 彦小狐
 あり〜 文名とを翻す化縁坂
 斜〜 いそ〜 秋女入相
 八月あるの傳も。家建て
 雲谷〜 水とむ〜 を聞せり。
 河〜 水とむ〜 水とむ〜 の左かり
 さ〜 水とむ〜 水とむ〜 際
 雲山有 雲山有 雲山有

此神女使をさる傳の巻了
 妻をやつ〜 荒波振女空
 水交事を探すと〜 思部〜
 海苔も海雲もさる垣〜 爲 呂川
 温い茶と極楽の繪を物さる。 徐英
 津ハ涼〜 幾人の夏 卓老
 袖の香も定めぬ縁水荒河や免 而后
 大又さう〜 思も河とや 月底

眉細文比丘尼う河と又塩女里と 山
 むし志の子れ態本の宿大巢
 枯竹のふそりもせぬ冬水雨小野栖
 容の羊よとととと治お心大阜
 夕水尚又脾暇くぬハ痔るるりきしを
 尾おふ水よりある月うけ士網
 兼括授身みくかきんをとと笠金蕉
 とれくわりのハおま水雪沙鷗

鳥籠れるも扇もは暮かしり虎男
 牛れ價ひの金おほけり云
 七里よあく所苑の下流水鹿野
 死て又さるる涅槃會れ友有
 長深ある室や毎日不二流ひ少汝
 遊ふ事もれえゆるまほと呉山

花を中うもお交物日くね 陸奥 巢居

河のれさいまふのかあま 薩 琴州

里合やあは 越后 喜年

昔柳の似るまのまの月日 呂川

多菊の夜くよかめぬ未あ 徐英

交むく春をくく 大坂 采彦

果る水や鴨の羽ま 伊勢 推已

松との交里や 鹿野

三月やあ物 金焦

く川雪水 水戸 湖中

砂道や 長崎 天外

来る 江戸 國村

月のお 伊豫 画 中

河多啼 河内 未 犯

雨風水中 楚山

雪は物うた世の道はふくもふ 阿波 夷拍
 くの松奥越き相織るやうなり 而后
 菜の花や侍勢と大和はまはる 三河 黄山
 子をつらう様えふよ来る男は 三河 岱呂
 蘇村や彼岸は鶴うぶこと噂、東鳴
 以てまるとふくまふく 伊勢 秋は風 李東
 松ふけは夕志めりくる 行布 紅葉は 幽嘯
 歩りふふ所を阿賀くくまの麻 加賀 鹿古

いろをい定めぬ事 安藝 はまより 架 凡十
 海産のいしをほく 大坂 うふ 銀獅
 世は狂ふまゝとまは梅の花 佳樂
 の川とある日ハきく花の鏡うふ 不轉
 蓮生やぬく咲てはほく 江戸 の宿 ぢ 周
 漕ぎのちきり ちきり 雪は舟、春蟻
 二日圓は雪よとちきり ちきり 庵うね 白之
 か ちきり 梅のちきり ちきり 大阜

三交啼きあはれ情の月の塵京月居
蝶と交り空又鰯の舟の心美濃千阿
月みねおとろはれや河舟をさし曲り 麗翠
身雨や枯木よとさるる遠おる 其倍
ちる花はま教もさるるさる薩巴水
雁低く飛夜とふれと舞有京梅價
昔を人よもさるるやほと加賀車大
雨風は美しうれとさる遠江木浦

日ふほるやかさひ坂又船舟音大坂三津人
流天川より狸もさるるぬ雲夜引伊勢曉鳥
木危ハ花又舟。おもふとれ多甲斐真恒
足洗ふあはかまさるる門 押二川
浪遠くさるるや磯の次丁の備 万賀
うら花はのちさるる冬は雨るが 恭浦
涼しきや床つるぬのよ後れ川路宅安藝
小葉さくく口ぬとさるるや推うとと江戸道彦

旅人きぬる目よつく梅折能登少女
さゆしは秋はしく形しよ能登寒崖
雪催ひまをよとよづく月の雲 春年
行まを花は花よのせよとよ 一應
送帆や湖の上まを冬うけする大津千影
啼止るまを秋の鶯うよ豊后南溟
ぬいそんしぬうけしよとよ月越后橘童
梅さげしよれもかきよるそ越后路夫

ゆく雁や月ハ暈着て山の上近江志う
あ髪は佳つるけ冬至が東雅
寂ふけよかかえきしよ菜摘可竹
心奥又海は鶴夜おとふよ陸奥如髪
ゆりくると物日は菜木おとふけり信濃雄途
帰る花さくらくくくくくくく伊勢寸奥
つちとよと藤つらぬ旅の抱うよ薩扇巴
山道やとくくく竹よとよ月京雪雄

かく尺のえ明るゝ涼一^{甲斐}天の河漫々
 空の花にのちるふはは流れる色^京土卵
 花さくゝと重なるソビ一菊が梅葉
 春の海も木の間をさくを月^{龜六}
 子に産や雀にちる梅の花^{但馬}笠仙
 門先のそれうすゝさや杜若^{丹波}武陵
 ころ雪や仔細の空も庵の庭^{携康}
 秋はよしの寂しきおふ^{大津}競れえ申齋

一それ末や枕にうゝの鷄に樹^{陸奥}雨考
 葉うららのほるをさくを重なる^{文露}
 月よりと三日と晴る隙もお^{五道}
 此本お如志くと流るり夜の露^播以^{信濃}文
 旅人又身ををつらそを梅の花^{雲帯}
 頭巾着る鯛の目ほる^{對我}
 雲がうゝよきち廣るるる^京月^{夫左}
 月よおるる妻を前へ^{岱雲}

花多る如く水に流るる節白く糸 月底
いづれや遊むる時 秋の山 相模 葛三
雪は如く二歳ちとる如く並らるる 薩 関叟
夕虹の夕や雪未の拵くよ 也 實
すつとてとて一日流るる小まき空 肥后 雪丸
春の風多るるのハ往らるる八重の葉 三河 桐屏
青菜つむ子先は雪は消えたり 光月
行かふ久ハ交し冬は心も中 秋 磨

沖中如く水に流るる節白く糸 帶梅
物も如く水に流るる節白く糸 江戸 巢北
笠をまきし形は袖も鴨如く 大坂 木僊
ちる春は水に流るる節白く糸 松亭
とる春は水に流るる節白く糸 陸奥 挑兒
花をかくて扱へ春はゆく時 世 竹
春は如く水に流るる節白く糸 甲斐 重行
さる春は水に流るる節白く糸 沙鷗

おくれえむ。夜うか来す梅の花 伊豫 樗堂

写来よふくもか。津うふ 信濃 素壁

三日有は清。山くくくはり 風蕉

人くぬ今をもか。女 女 不さ

おしおは中。くくくはり 近江 可盈

もうく飛。有は常きありはる。掾陽

おまふはふれ。方やるはる 伊勢 朱實

正月の日和。いそは夜。雨 大坂 升六

有あまき。物ほく。くくく 兵庫 一艸

鳩控。くくく。雪は隅田川 江戸 完来

一日は不。二は雲。おふく 東 閣

さあ。くくく。庵は菊 松 菊

くくく。くくく。秋の山 信濃 希杖

猿人。くくく。閑古。兄 下總 直

山報。夕日。くくく。何雨。以言

梅柳。世ハ。くくく。又い。く 陸奥 雄淵

奥山や又ゆる。おと葉木如花 伊勢 丘高

小舟の等々宿と定しを指尾を如 巴流

きく花はの春や押おん谷如多 梅士

ゆくや雪をさほさぬ松の風 薩 林志

折えたる梅や月夜の氷如上 大坂 長齋

おやうくとれ巾を上るを天王寺 甲斐 有斐

春ゆめ斬鴛や岩如明さく 南 鶴

万葉よ筑ひ勝るる女うさ 三河 待亮

瀬川や終るは流は花のうみ 寸、美

振り葉又書に書とくる 孔うさ 梅園

絆と交来る夜う吼お門の犬 破風

一おしは尾花如き如る月夜哉 出雲 花叔

山橋くわけても多るハ花又病る 菊史

湖をくししおらうりおお撲え 大津 宇洋

まら夜月の又寂し又穿り回れ 信濃 柳莊

絆と交来るはらうとくおしひきや 士朗

さとしとせん様ちとさむ小ぶ邦 松園
身うふとせぬ人のちや更衣 甲斐 嵐外
間曳茶や有えのちを道くを 江戸 胡準
あけ山を雨よぬすう山ささく 大北獲
あけ山よ雲お重さうの月夜邦 花央
涼しきや蟬おとをつく竹 大坂 魯隱
一口お事ううつるし門清あ、空阿
葉の葉お中よ寂し文柳あ 加賀 甘谷

きり指やあさうふれと暮迎し 池田 瓜坊
あけ際のお雪くらんかぶ素邦 大坂 尺艾
葉お花よ東寺お塔の夕口お 專阿
一ししお室よ又えお色ぬお上 橘亭
花標おをさくしと雲おお。 拍臺
秋風のちとひぬをらけし 伊勢 亀堂
まろ二つ梅お世まてハ梅の世 長崎 菊也
茶のちおや木津川お。人ハ渡 岳輅

山梅うきげん床ゆく庵りふ 陸奥 平角
 雪くふや夜ふ血子喰る口をくも、冥々
 行まほゆゑ道あり次广明る 朝蒲
 ちやくと並葉の上を雲は雁 京 車溪
 うえとりておもく路やみ葉摘 九魯
 此月をを前明し門回らふ 木天
 松ハ木は雨うらまを春の風 薩上 只冬
 啼 初し口ハさるる小夜子 大坂 井眉

雨あても一くせ河や磯は松 下總 雨塘
 ころ秋や響り子持送ふ砂の上 曾洛
 おもふ夏ふき床執くお撲気 走井 烏頂
 落鮎は空ゆくをよくとむく 薩上 如海
 門より飯くふ稿書あは立不れ 花鏡
 住ふれくをく六知る凡は枝川 信濃 其翠
 山むとく戸口はか来るみ葉 三河 舐糠
 きれふ見くをや今物啼く可き、卓池

夜の雨を伝ふるさるくは 逸人
不測来る人かきむそえさゆ道 兵庫 桐 拙
雄子啼や物たて流のともおし 下野 雄 尾
砂浜は知らる響やまおれ 薩 蘭 齋
夕ふみや子供ハまおれ花のこひ 清人
草の葉よかきむ暑くもほろ 伊勢 五 雄
星川やあまふおる月一丸 肥后 鹿 明
起くお杖ふたつくも葉か 肥后 岫 丸

かみ流ふや山ふつふ庵れあ 舎童
秋もくや漢村の物見え 美濃 良 平
鱈おふさすこしおる小者か 夙 也
あけの月あやとり花二日 士 綱
子よほしやあふるお小家の董買 得 芝
蘭お香やふりさしと夜の更 飛騨 儲 史
あふみのもを来る梅の匂ふ 行脚 吳 山
涼しさを思ふれく銚の松 行脚 丸

十をうに家も又えり夕柳陸奥素御

芝野と指ゆくと日うちふり色岨英

ちる花の中や又えきく星一ツ二泉

とく夜の更る音ゆり花大坂鯉春哉

夢もくしゆりゆりゆり水の音日野停立

志しりよはる葉ももる本ハ橋日野か士明

世を花よようせうきふの命下ふ水戸平齋

鶴の子を拾ひよかんや望もよれ雲水戸規外

涼しきや枕かきこえて雲はゆく播磨玉眉

眠ゆれをよもふり以指尾花三幸

むふしくハむとハも色に梅の意長崎祥禾

鹿追よ河のハ行ぬ麻はき美濃楚雀

きふ花はよ二物をうぬ小倉がさしを

糸の花は明くはきし睿戸の口甲斐鴉聞

古寺はぬふ古いきを花は月甲斐槌む

山里や夢の中あふ一一くは江戸寥松

一ふれてハ石山をる湖れき 大巢

有れ雲かの大あまふよか 信濃 蕉雨

垣をふやまををういんをれき 女亭

住あれ一糸良れ備や社 万也

あゆの湖よりふさる冬木 二朝

量比や雪いりしもの 薩 人の声 蒼江

あ、菜えのふととや 拍亭 や山水 拍亭

あ川よりふ月より 越后 秋の花 岐東

茶山花やゆふの 大坂 敷の中 交太

尺とていあさ尺 近江 あぬ不 亜溪

夕左や木の 鵬南 ちの 鵬南

咲をふふ 音湖 衣美 音湖

十月や思 大坂 菜 春思

隅田川 上野 風情 月鴻

ふ臭 豊后 又 了國

松 陸奥 さら 日人

花又歸あけや佛の子は日子 應汀
 裏山や雑木ありは曼紅葉 江戸 午心
 月花よこちさひねや閑台を、ノ且
 露あけ川やふかえりおほはれ 長門 羅風
 名の所。夏あふき次は月 蕉兮
 岩賣おほりてを歩け日く 三河 蛙声
 雪もふれ堂もあふと 如庵 三河 白鷹
 ぬ葉ふくはるる哉浮け日和雲 一夢

あ仙のこふ類ひあけたは花 安藝 篤老
 今花の大きう啼てい 長門 憐霞
 花の香やむうかき 一 曇 謀之
 稲妻やとこ 一 雲 稗 騏上
 夏は月入江の夕は 大山 交 太
 川野の夜を 長門 吟 松
 木枯の庭も 逆江 芳 之
 明けくや 陸奥 百 非

歩口うゆのち了る一尾花う船 裁后 左琴

夜の橋くまは人のあはれ 出羽 長翠

夏月有酒あけききと定めあり 松呂

色既すすられ嘆きん此系四多 千柳

憂事一れはまは貝とる汐子 女 のよ

一くれも月あつるこ小笹系 坂本 于當

皇朝や龜は卵の産お 信濃 席杖

漣やふふふとさる夕乙色 下總 大筇

蝶と交れ孔を張り寺は門 安藝 宇拍

まはゆきおの松葉も草 大坂 音淵

牙の帯又似る師走は級治 元美

と交月ふれえしと小敷 小野拙

ふおとぬ夜のあはれを紳と交 伊勢 涼濤

松葉おく風もいとふ 呂川 右雄

とゆくも春うたうち 伊勢 椿堂

窓ふもふとん又えり 梅間

うつりて身の放蝶やゆゑ糸てり 薫固
さしむる身は厚しや蓮は花 呼夫
傘ささしむる柳は日めさる 塲 喜齋
大空はあけぬ色こしうめの花 遠江 一猪
さか花の茶は本は動く月夜に 虎男
更衣さしむるとや 一とあ 川 の風 宗淳
かみはあはる古賣糸はほとと 秋夫 陸奥
人の来りて秋は来り山の中 卓老

うづろふはあはる 楓の嶮峻は端 珉屋
うづろふはあはる 花は本は動く 錦織 菊子
行雁は遠つてや鶴の一 近江 文常
蝉啼や行濃路三日馬の上 二石
あはる中厚は啼く 月士學
山は川花はさしむる 雛は春 鏡右 龍敬
鴨ふくやき花はと来り その 双鳥
あはるつむる 良坂はとや 通 也厚

くろ雁や冬 雪も新の軒の山 蟻又
美由緒父又多ふ日を小古自 伊豫 其調
大くの月夜又河一巳梅の花 甲斐 可都里
ちる花や冬又一日松花み 岱呂
春風や雪中又暮る人の姿 三河 白圭
水河のより類をいとも 柳井 信濃 伊吉
雁好くけさえり砂ふく花うふ 豊后 葵亭

竹右

ぬまはうち又掃て久しかり庵の煉
くし交控さるかす 舞花 雪 鹿 明
左ふふ松花間又松の影を 有
耳は大きふ人を 有
名月の山をふりける 猿花を 明
焚火をくく 走る此木 栗

ゆく秋をんね底に又も形ありて
 滞り戸おさへ琵琶を隠さる
 夏は夏の袖にふふき多きふ
 羽ぬき帯に鴨もをるぬ 嘆
 神垣に道は茂りて有る
 へさ先の歌よつてさうつた
 世の中の色は流る川の色
 風も歌に付をふく
 有、明、有、明、有

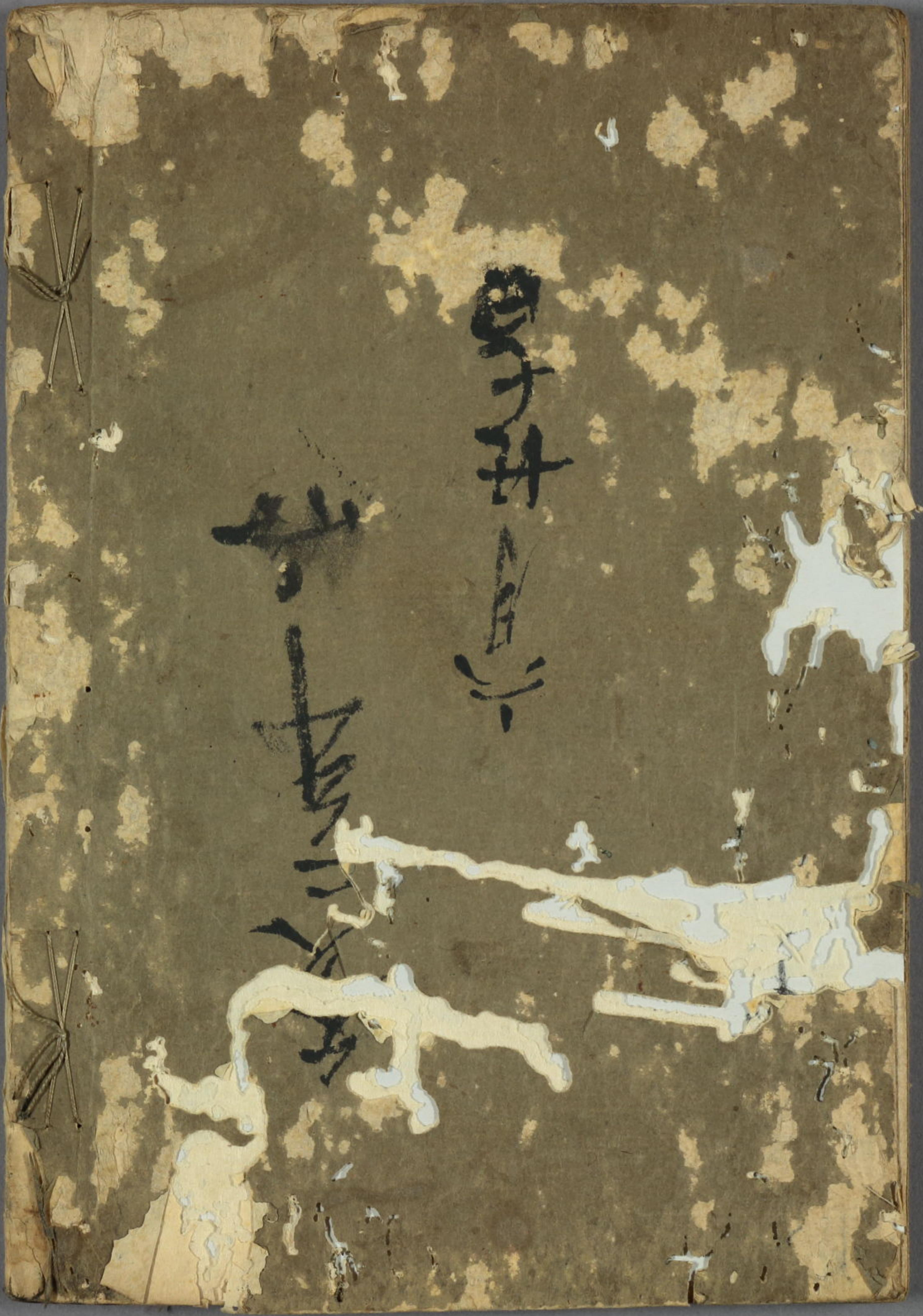
尋ずられぬ人の妻に紐うちて
 雲は古葉をぬふさし作
 へ川流るふふの裏坂ほくく
 又夫の来は青田葉
 有、明、有

久元年

大鶴庵竹有閣

紫巖岱雲按
一樹菴楚山韓

松可



西大井

六日